

関係各位

調査研究方法検討会かわら版

■ 第48回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る7月24日(土)、25日(日):リーガロイヤルホテル(大坂)にて第48回調査研究方法検討会が開催されました。場所の設定・準備などは絹巻 宏先生のお世話になりました。ありがとうございました。検討会の報告は、各演者の方へお願いしております。ご発表いただいた研究の概要とともに検討会で議論された内容も含めご報告いたします。

24日(土)

○「新型インフルエンザワクチンと罹患有無のケータイによるアンケート」

橋本裕美

以前本検討会にて紹介したケータイによるアンケート調査を、新型Fluワクチン後の罹患有無調査で実施し報告した。調査方法の不確実性に加え、今シーズンのFluはワクチン接種前に既に流行が始まっており罹患有無がワクチンの効果と限らないこと、対象が無作為抽出でなく、バイアスがかかっていることから統計解析に相応しくないが、解析を行なうと新型Flu接種とFlu罹患には強い負の相関関係が見られた。より相応しい調査に活用するようアドバイスを受けた。

○「新型インフルエンザ流行期における小児科臨床医の臨床プロセス研究」

岡本 茂

本研究は質的研究で、背景・目的・研究デザイン・インタビューガイドを提示。現在、33名のインタビュー終了。研究する人間(岡本)の思考の徹底化「データの解釈のときだけではなく、研究計画の段階から結果の公表、そして、その後に至るまで、自分が選択的に判断してゆくプロセスを自分自身に対して言語化してゆく」1)から分析テーマの設定・分析焦点者などを述べた。①昨年のできごとであり、忘れていない可能性はないか。②分析焦点者の位置付けは ③分析テーマの変更の倫理的な問題は ④男女の差はあるか ⑤スノーボール法・縁故法の限界は ⑥臨床プロセスという表現はいかがなものか ⑦他の研究との関係は 等の質問・アドバイスを受け、さらに研究を勧めてゆく予定である。

文献1) ライブ講義 M-G T A-実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 木下康仁 弘文堂 2007

○「日常診療における臨床診断の根拠と類型を調べる」

日野利治

日常診療において診断は、医療面接、身体所見、検査所見のどの時点で行うことが多いか。また、その診断は患者を一目見ただけでついたか。病歴、身体所見、検査所見を総合して考えたか。その診断に根拠はあるか。単に確率的に高いものを考えているだけか。このような疑問を調べるために研究グループを作り、1日で最後の38.0℃以上発熱患者1例の診断過程を1年間にわたり記録し、検討する研究計画を提案した。討論の結果、記録項目、内容、対象症例の選び方等を今後もう少し検討することとなった。

○「ワクチン接種後に当該疾患に罹患した場合、その経過は軽症化するか？」

幸道直樹

ムンプスまたは水痘を対象としてワクチンの有無で、罹患者にその症状に、軽重があるかどうかを検討する事は可能か、調査検討委員会に提出した。

問題点としては 1:疾患の重症度の定義 2:疾患への治療の影響 3:診断の精度をあげて、最終的にはムンプスを対象として、ムンプスと診断したらワクチン接種の有無を確認し、それから前方視的に1-2週、種々の症状について観察することで提案、意見を伺った。各委員から、先行文献の調査ができていない、血清学的調査が無いとPVFかSVFかの区別ができない、などの問題点を指摘された。また調査票はPCで記入することは集計は楽だが入力結構手間な事も指摘された。

本研究は宇治市の小児科勉強会のメンバーでのグループスタディを前提としており、入りやすさが重要なので、もう少しワークシートを作り直してスタートしたいと考えている。

25日(日)

○「呼吸障害で紹介した新型インフルエンザの臨床像と重症化危険因子

－徳島県内25施設での検討－

藤野佳世、鈴江純史、田山正伸他

新型インフルエンザにおける呼吸器合併症への外来対応の問題点を明らかにするために、開業小児科より基幹病院へ紹介した症例の臨床像と重症化危険因子の検討を行った。対象は、平成21年10-12月に新型インフルエンザと診断された症例で、アンケート調査を後方視的に徳島県内の小児科開業医50施設に実施した。調査内容は以下の項目とした。1)総診断数 2)総紹介数、各紹介例での 3)性別 4)年齢 5)紹介までの日数 6)最高体温 7)咳の強さ 8)呼吸困難の強さ 9)SpO₂ 10)ワクチン接種回数 11)抗インフルエンザ薬投与 12)喘息の既往 13)喘息定期治療 14)入院日数 15)入院中の酸素投与。回答より臨床像の解析及び、入院後の重症度を示す因子(入院日数、酸素投与)と紹介までの患者因子との関連性を多変量解析により検討した。25施設から回答(回収率50%)があり内紹介例のあった22施設を解析対象とした。3ヶ月間に9837例の総診断数で内44例の紹介があった。紹介患者では4-5歳にピークがあり、男児に多く(70%)、SpO₂<90%が32%、喘息の既往41%であった。救急搬送例は9例でSpO₂の低下と強い呼吸困難がほぼ全例に認められた。重症化危険因子はSpO₂低値と強い呼吸困難が明らかな有意を示し(p<0.01)た。

開業医からの検討として良いのではないかと全体的には評価をいただいた。結果の中でインフルエンザの総診断数に対する紹介例数の紹介率の算出について、両者の診断根拠が同じかどうか、紹介症例と非紹介症例の比較はどうか、SpO₂をどの程度のインフルエンザについて施行しているかなどを討議した。ご指摘の点を参考に今後修正していく予定である。

○「インフルエンザ(新型, 季節性A, B) およびRSV感染症における発熱と咳症状の比較」

鈴江純史

冬季の代表的な感染症であるインフルエンザ(新型, 季節性A, B)とRSV感染症について、その主症状である発熱と咳の程度と経過を比較して各々の特徴を求めた。2007~2010の間に当院を受診した新型インフルエンザ(Influenza A/H1N1 pdm):126例、季節性インフルエンザA:56例、B:54例、RSV感染症:70例について、咳と体温の記録表(外来小児科11(3))と一部は問診により解析した。評価項目は①年齢、②性、③37.5度以上の発熱期間、④最高体温、⑤最高体温病日、⑥最高1日咳点数、⑦最高咳点数病日、⑧1日12点以上の日数、⑨二峰性発熱の有無、⑩最高咳点数病日と最高体温病日の差、⑪発症から診断までの時間の11項目。評価項目の平均値が大きい順に以下に示す。①年齢(B>pdm>A>RS)、②性:男の比率(RS>A>pdm>B)、③発熱期間(RS>B>A>pdm)、④最高体温(A>B>pdm>RS)、⑤最高体温病日(RS>B>A>pdm)、⑥最高1日咳点数(RS>A>B>pdm)、⑦最高咳点数病日(RS>B>A>pdm)、⑧1日12点以上の日数(RS>A>B>pdm) ⑨二峰性発熱の頻度(A>B>RS>pdm)、⑩最高咳点数病日と最高体温病日の差(A>B>pdm>RS)。以上より、新型インフルエンザは項目③⑤⑥⑦⑧⑨で最低値を示し最も症状が軽かった。RSV感染症は③⑤⑥⑦⑧で最高値を示し最も症状が強かった。

1各疾患の迅速検査実施基準について、2RSV感染症は流行型が年度によってことなること、3インフルエンザは抗インフルエンザ薬の使用の有無を区別すること、4RSV感染症などの発症日をどう判定したかなどについて質疑応答があった。今後これらの点を参考に検討を進めることとなった。

○「テレビドラマにおける喫煙・暴力シーンの現状について」

牟田広実

現在までに調査した2002、2007年の喫煙シーンの調査結果を供覧した。予想に反し、本研究結果では2002年に比較して2007年では喫煙シーンは減少していなかったが、2007年のみ設定年代が過去のものが2作品含まれたための可能性がある。また、喫煙シーンが減っていないにもかかわらず、本邦の青少年の喫煙率は低下しており、喫煙シーンの視聴という曝露が青少年の喫煙開始と関連があるという

本研究の前提についても、疑問が呈された。番組の抽出法などの調査内容も含め、これ以上の調査が必要か、再度検討する。

○「コンジョイント分析を用いたヒブワクチンの接種費用と接種意思の関係」

牟田広実

本研究の命題は「ヒブワクチンの接種費用がいくらなら、何%の保護者が接種させようと思うか？」である。その調査方法として、接種意思に関連する因子を様々な設定で変化させ、その条件での接種意思を問うコンジョイント分析を紹介した。議論の中で、シンプルに接種費用と支払い法（償還、現物）に限って調査することでより外的妥当性が高まる可能性や、世帯年収などの個人情報の取り扱いに注意する点、研究の限界として現在の公費負担額に誘導される可能性が指摘された。

○「5歳児（健診）用・簡易発達障害チェックリストの作成」 宮崎雅仁

平成17年度よりH市で施行されている5歳児健診で蓄積された問診票データを基に、「保護者のための気づき」 or/and 「一般小児科外来でも利用可能な」チェックリスト作成の試みを検討した。H市での5歳児健診の内容を中心としたチェックリスト作成までの経過とその健診で発達障害群と定型発達群で有意差を認めた6項目を基本に作成された案を提示した。質問項目の妥当性、ダミー項目の追加、回答方法の2階級化や統計学的処理等の問題点が指摘された。

○「インターネットを利用した小児科外来におけるインシデントの全国調査」

斉藤 匡

具体的な調査開始に向けて作成した実施計画書と倫理審査申請書の内容について議論した。

Web-based の調査を成功させるためには参加者のモチベーションを維持することが大切でそのための工夫をもっと検討する必要があることが指摘された。漫然と参加者からの報告を待つのではなく、毎日トピクスを更新したり、進行状況を含めてコメントを発信するなど、「push型」で情報発信をしながら調査を進めていくことになった。

本検討会は日本外来小児科学会リサーチ委員会に属しています。本検討会についてご相談がありましたら何なりと下記までFAXまたはメールでお問い合わせください。

連絡先：〒833-0027 福岡県筑後市水田991-2 杉村こどもクリニック 杉村 徹

FAX: 0942-52-6777 , E-mail: sugimura@kurume.ktarn.or.jp